
うろんな+せいぶつ

夢猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うるんな+せいぶつ

【Nコード】

N8526L

【作者名】

夢猫

【あらすじ】

現代的オカルファンタジー。

不可思議事件に取り組む公務員たちのお話。

出会いは突然？はん、冗談。思いつきりしつこい前置きあったじゃん。

（前

気軽に読める読み物を目指します。

出会いは突然？はん、冗談。思いっきりしつこい前置きあったじゃん。

退屈してたのは事実だし、確かにいつもと違う破天荒を求めてたのも事実だ。けどさぁ……。とびきりすぎだった！

出会いは突然？はん、冗談。思いっきりしつこい前置きあったじゃん。

「んーやあっぱりコネって持ってるもんだよな」

何のだ？

おめえこそ誰だつつうの。最近断りもなしに、人の頭ん中でしゃべんな。

なんのって、この場合今この瞬間、話題大沸騰中の私立博物館。今時珍しいオカルティクな大ニュース！知りたい？知りたいよな？知りたいって言えよ。

.....。

無視かこの野郎。…ま、静かでいーけどさ。

気を取り直して、俺は朝日に輝くでっかい建物を見上げる。顔が勝手に笑いそうだ？

「は！今朝のニュース見た時はジョーダンだと思ったけどー、いやー、ま・さ・か マジだったとは」

ティラノの骨格標本が動いた！！

朝飯食うのにテレビつけたら、キャスターが大興奮してんのさ。当然、俺は突っ込んだ。

いやいやいや、ありえねえよ？

でもさ、面白いよ。久々にな。だから、館長やってる叔父様にデモンワしてみたら、怒り狂ってんじゃん？

何処の不屈きモンが、私のティラノを……！！！！

てさ んで、怒りで訳わかんなくなってるトコつけ込んで、現場に入れてもらうことにした。フォーカスさん達が轟いてる正規の玄関なんて、使わねえよ？俺だけが知ってる、マル秘の入り口。職員用の非常はしこのブース。もちろん、はしごは下りてないけど、裏だからって手入れをサボりまくったが、枝延ばしてんだ。木登り

は得意よ、俺。

「さつて、開いてるかな？」

その二階の非常扉前にたつて、ノブを回すと。

「おっけい 叔父様ナイス」

ちゃんと開けといてくれた。やったね

入ると独特の匂いがする。なんだろう、古いものの匂いって言うか、歴史の香りっていうのかな。此処にある叔父様のコレクションがどんな価値があつて、すごいもんかなんて、どおでもいいんだけど。俺、こういう空気、好きよ。なんか、居心地いいんさ。だから、入り浸つてんさ。半分は、叔父様の入 れてくれる茶と菓子目当てだけど。

館長室にいないだろうから、事件現場に行つてみるか。職員用通路つていいよな。余計な人間にあわねえし。

恐竜の展示場は二階。学芸員がするような、白い手袋をはめる。一応「お手伝い(バイト)」扱いで入れてもらつてるかね。ケーサツいるんだろーし、摘 まみ出されちゃたまねえよ。

「展示室とーちゃく。叔父様は…っ」と

お。いたいた。

「叔父様！」

声を掛けたけど、叔父様はバーストしてて耳に入つてねえ。

「ちよつ、そこ！不用意に触るんじゃないやありません！！素人がっ！！」

あゝあ。ホントに頭に血が集まり過ぎ。確かに、バラバラになったティラノはけ悲しいけども。背後まで言って声を掛けた。

「叔父様って！けーじさんにそゆ事いうと、あらぬ疑いかけられんぜ？」

がばつと、振り返った叔父様は俺にまで怒鳴ってきた。

「遅い！空君！！いいからこの不屈き者共を何とかしなさい！私のコレクションを乱暴に扱う輩は許しません！！」

…ダメだこりゃ。

こうなったら話にならねえことは、身内はみんな知ってるから、職員の皆さんも苦笑い。

そんな時だよ。初めて奴等の顔見たの。

俺が叔父様のマシンガントークの矛先を、どつかよそに擦り付けてやろうと企んでるトコに、やつらがやってきた。入り口から堂々と。

「ん？」

なんつーか、異常に目立つ奴等が来てんじゃん。なんだあれ。ケーサツにしちゃ若いけど、特に止められもしねえまま、突き進んで来んぞ？

…なんかヤ…な予感。

とか考えてる間に、来た来た来た。なんつーか、独特な空気纏った集団が。

「…失礼。館長さんでいらっしやいますか」

年上つばいにいさんが、暴走街道まっしぐらな叔父様に向かって、無謀にも声をかけて来やがった。…空気を読め空気を。

「は！？何ですかあなた方は！？」

ほれ、氣い立ってる氣い立ってる。ただでさえ機嫌最悪のところ
に、そんなよれよれしたスーツ中途半端に着て、超エアリーな寝癖
ヘアで挨拶なんざ…。

「出て行きなさい！私のコレクションに蚤や虱がついたらどして
くれるんですかっ！！」

…それみる。普段ならぜってえ言わねえような暴言が出た。どう
すんだメガネだけはオシャレなお兄さん？

「いえいえ、ちゃんと毎日シャンプーしてますので」

嘘つけ。とか、おそらく皆が心の中でツツコンだ。けども、この
にいさんときたら、

「私達こつという者です」

そ知らぬ顔して名刺を差し出した。

おお、動じないんか。鉄の心臓だな。…で？どつという者だって？
伯父様、早く受け取れ。俺に見せろ。

「…叔父様、差し出された名刺は受け取ってやんなよ。いくらアポなし訪問にしたって、失礼だろ」

何時までたつても、叔父様が名刺を取ろうとしないから、言つてやると、しぶしぶといった体で、英国紳士ルックの叔父様は、名刺交換をした。メガネのにぃさんが、俺に目配せする。

どうも。助かった。

叔父様の後ろでこつそり、右掌で扇ぐようにして「いえいえ」と応えと、その兄さんの後ろについていた人と目が合った。

お。美人じゃん。

ながい黒髪に黒目。人形みたいな整った顔。愛想はなさそうだけど、こんだだけ顔が良ければな。歳は俺と同じくらいかな。高校生ぐらい。ここにいて、って事は、ケーサツ関係かな。叔父様の手の名刺を見て、読み上げてみる。

「警察機構…チヨウジヨウゲンショウタイサクカ?…本部長…菊池秀司。へえ…警察って手帳のイメージだけど、名刺も使うんだ」

「あ。手帳もありますよ」

そう言う声に顔を上げると、何時の間に出したんだか、二人とも黒い手帳を提示してた。見ると、なんかまた、ちよつとイメージと違うんだ。例の警察のエンブレムは小さめで左上についてるだけ。あとは、スタイリッシュな身分証みたいだ。

「捜査官、夏城翠…十七歳？若っ！」

例の美人さんの年齢に、つい口滑らした。だってさ、タメで警察勤めってどうよ？びっくりするわ。

「…アンタは？」

おお、口利いたよ、夏城さん。おちついたアルト声。

「俺はバイト。名前は永月空。奏華学園高等部二年A組。これ学生証いる？」

「…永月ということは、永月館長の…」

「館長の兄の末っ子。奏華学園の理事長の孫。な、おじさ…」

…ヤバイ。

振り返ってみたら叔父様の顔が怒りで青白いぞ…。こーなると二トログリセリンなんだこの人は。さりげなく離れとけ離れとけ。

「…超常現象対策課？十七歳？貴方が本部長？…」

叔父様がブチギレるのは早い。肩を震わせて、館内に響き渡る声で絶叫。

「人をからかうのもいい加減にしなさい！！！！！」

落ち着けー。館内はお静かに叔父様！

その不届き者二人、外に捨ててきなさい！！！！

とかいう館長命令で、俺は二人の腕を引つ掴むと、展示場から通路に引きずって出た。展示場から離れた階段のところで、手を離す。

「悪いな。あの人、ちょっと真面目すぎるもんで、不可解なものとか、胡散臭いものとか、だらしないものとかにぶち当たるとキレるんさ」

一応謝ったけど、意外と気にしてないっぽいチョウジョウナントカのお二人。にいさんにいたっては逆に礼言ってきたよ。

「いや、助かったよ。正直ああいう人は苦手だね」

「だろな。ぜってえ仲良くできなさそう」

「…菊池さん。随分な言われようなのをわかってるか？さりげなく、不可解で胡散臭い、だらしがないと言われてるんだぞ」

おっと、そこ指摘するかね。夏城翠。しかし、目のでかい人だ。典型的なかわいい系だね。

「金髪は館長の気に触らないんだな」

おっと。俺の髪のことか。

「ああ。これ地毛だかな。天然モノには文句つけようが無いだろ。目が青いのもカラコンじゃないぜ」

でも、俺は日本人。ハーフ×ハーフの日本人。エイゴワカリマセ。話しかけるな外国人観光者？

「きれいだね。いいなあ本物」

ボツサボサの髪の人に羨まれても、な　　。

俺的には、あんたの連れみたいな、長い黒髪とかも、かえって憧れるんだけど。ま　金パって目立つし気に入ってるけどさ

「どもども。ま、その辺で茶でも飲んで、館長が落ち着くの待ってまた来なよ。普段はあそこまで過剰な反応しねえから。じゃ」

仕事ガンバレ。俺は戻って、この不思議を観察すつから。

館長が落ち着くの待って、また来なよ。

そう、金髪に言われた。

周辺の聞き込みに回った俺たちは、二時間ほどして、再び博物館に足を踏み入れた。大方の調べに一区切りついたらしく、現場は閑散としており、館長の姿は見えない。先程の金髪の少年の姿も見

えないので、職員に尋ねると、応接間に通された。

「あ。ホントにきた」

…貴様が来いと言ったんだろうが。

苦笑いし、茶を運んできた永月空は、すぐに、館長をせきたてて戻ってきた。なだめ方がこなれている。

「まーま。そう言ったって、ティラノが戻るわけじゃないんだからさ。使えるモンは使って、犯人捜して、弁償させようぜ」

俺たちが通された扉の反対側にある扉から、そんな声が近づいてきて、扉がほんの少し開いた。

「まさか、信用できるとでも？」

ドアの隙間から、館長の足が、踏ん張っているのが見えた。どうやら俺たちは、よほど嫌われたらしい。

「伯父様。古代エジプトの石版に、魔力があるって、信じてるんだろ？ だったら、超常現象がぜったいに、無いとは限らないじゃん」
「石版は、史実に根拠を見出せますが…」

「今の科学神話だって、錬金術のたまもんだろ？ いいじゃん、減るもんじゃないんだから、話してやれば。あっちだって仕事なんだし」

館長が力負けしたのか、ドアからでてくると仏頂面のまま、卓の向かいに掛けた。後ろから来た永月空は、へらっと笑って、なぜか伯父の隣に掛ける。

「…お待たせしました。それで、お聞きになりたいことは」

社交辞令以外の何物でない態度。今回に限ったことではないが、認知の問題か、俺たちが歓迎されることは少ない。…いや、この場合は、上司の所為か。

「ええ、じつは、このあたりを聞き込みましたら、妙な噂を耳にしまして」

俺の上司、菊池さんの言葉に、目の前の男は、眉間のしわを深くする。

「…という」と

「半年ほど前に、改修工事をされたそうですね」

「それが何か？」

「その頃から、この建物で夜半、妙な人影を見た。そういう方が、たくさんいらっしゃるんですが」

「…」

一瞬、けれど確かに、館長は横目で永月空のほうを見た。奴も気づいたらしいが、心に当たるところはないのか、茶をすすっている。

「巡回の職員が何かでしょう。コレクションの警備は徹底しておりますので」

「…警備の方に、サンルーフや、貯水槽の上まで、見回りをさせておられるのですか？」

まただ。確かに、一瞬、館長は隣に注意を遣った。金髪のバイトは、茶菓子をつ、頬ばった。菊池さんも気付いているはずだ。何

かを隠している。…少し、揺さぶってみるか。

「…気付いていたんじゃないのか」

「何にでしょうか」

館長の声が、明らかに冷たくなる。

「この博物館に、出没する何かにだ」

「まさか。私がそんな不届きモノをほおっておくとても？知っていれば、即刻警備を倍にしましたよ」

「…そうできない事情があつたのではないか？」

館長は、鼻で笑った。その顔は、先程とは変わり、一部の間隙もないポーカーフフェイス。何かを読み取るのは困難だ。そのまま、館長は席を立つ。

「やはり時間の無駄だったようですよ。空君。話になりません」

話を振られた永月空は、肩をすくめてカップを取った。

「そか。そりゃ悪かったな、伯父様」

「お引取りください。お話できることはすべて、警察のほうにお話しましたので。それと」

振り返った館長が、もの言いたげに俺を見た。

「女の子は、足を開いて座らないように」

…このクソ爺。

「うゝ、伯父さま…それ違う…」

永月空が何か言いかけていたが、考えるより先に、口が動いた。

「誰が女だ!!」

人のコンプレックスを刺激して、謝りもしないクソ爺は、きびすを返して応接間から出て行った。菊池さんの、

「良くあることじゃないか。どうせ、後数回の付き合いなんだし、押さえてよ」

と言う発言は、一理ある。が、世の中には許せない事という物も、存在する。

徹底的に、調べてやる。覚悟しろ、爺。

とぼつちりを受けた、同僚たちの声。

「菊地さん…なんで夏城君の周りが、殺気に満ちているんです?」

「んゝリベンジに燃えてるんだと思うよ。しずちゃん」

「…女に間違われたか、チビって言われた?」

「わわ!声大きいです!」

出会いは突然？はん、冗談。思いつきりしつこい前置きあつたじゃん。

（後

駄文にお付き合いいただき、誠にありがとうございます。
次くらいで、一通り、主要キャラを出したいです。

捜査って、難しい（前書き）

…久しぶりになってしまった…。

捜査って、難しい

捜査って、難しい

空君、君ですか。余計なことを喋ったのは。

まさか。そこまで仲良くもないし。

ではなぜ、あのことを…。

目撃者が多すぎて、口止めが間に合わなかったんだろ。明人さんのせいじゃないと思うぜ。最近特に、よく出てたしさ。

…そういえばその、明人君はどうしました。

デンワしたら、熱が出たってさ。あの人、チキンだから、幽霊博物館に出勤したくないだけかも知れねーけど。

よしなさい！その呼び方は！幽霊だなんて！

つつてもさあ…もうネットとか、情報広がりすぎて、潰しても潰しても…限界って奴だと思う。

ああああ、もう…とにかく！元を何とか…。

簡単に言うけどさ。もう大抵の事はしてんだぜ？人間じゃ忍び込む隙間なんて無いってのに、出るんだもんよ。…本物のほうがまだ安心…。

馬鹿言わないで下さい！！

私は、博物館の向かいにあるカフェで、博物館の一室の会話を盗聴していた。傍目には、イヤホンもしていない私は、平日の昼間に暇を持て余しているように見えるんだろうな。

でも、一応私はお仕事中。花村静、はなむしずか十八歳。警察機構、超常現象対策課の捜査官です。只今、……博物館の館長室の音を盗聴中です。違法行為じゃないんですよ。……自分の力で聞いているだけなので。

「…特に、事件に深く関わってるわけじゃないみたい。…博物館の評判に傷がつくのを、嫌がって、隠したがってるんだと思う…」

私の言葉に、菊池課長が、溜息をはいた。

「そうか…、当事者が犯人だったら楽だったのに…」

部長、その発言は、どうなんですか…？

「…あと、空君って子、かなり調べてるみたい。出沒する時間とか場所とか…」

「やはり、永月空ながつきそらに話を聞くのが早いかな…」

「…どうやって？」

私の隣でコーヒを飲んでいた怜君が、気の無い声で聞く。仕事で私とパートナーを組んでいて、私より二つ年下の、十六歳。つかみどころの無い男の子で、でも、私よりずっと落ち着いてる。ただ、基本的にやる気は無いみたいで、チョコレート色の前髪の前向きの目が、今日も眠そう。…でも、ちよつと可愛い。猫みたい。

「俺たちには話さないだろうな」

夏城君^{なつき}が、私たちのほうを見て、そういった。彼も、私より二つも年下なのに、シッカリし過ぎてて、ちょっと怖い。

「幸い、永月空は人懐こい。野次馬の振りをして接触できる」

…え、まさか。

嫌な予感がしたところに、菊池部長が止めを刺してくる。

「任せた。しずちゃん、怜」

私、人見知りなのに…。
なのに、なのに。

此处は、私立奏華学園高等部近くのケーキ屋。調査によると、永月空は毎週木曜日には、必ず此处に友人と来る。とか、夏城が言うので来た。どうでもいいけど、人が多い。儲かってるんだな、と思う。

対象は、丸テーブルの四人席に友人らしき少年と、二人で座っていた。

どうしようか。

俺もあんまり、こういうの、得意じゃない。…けど、花村も頼りにはならないしね…。

「あの」

声を掛けると、青い目がこっちを向いた。

…あ。花村、ちゃんと付いて来てる？確認するの忘れてた。

「席が開いてなくて…ここいい？」

呟きつつ、花村を探す。

視界にいないと思ったら。年上のくせに、俺の斜め後ろに隠れてた。

「どーぞ。デートの邪魔でないなら」

デート？ああ…花村と一緒にだから…。

「で…でーと!？」

花村がやたらに裏返った声を出した。…にわとりみたいな？

「あれ、違うんだ？じゃあ、よかつたら、俺とかどう？」

「えええええ!？」

対象の友人に、ナンパされて、気が動転している花村はほつとこ
う。仕事しやすいし。

「ほどほどにしないと嫌われんぞ?」

永月空は笑いながら、席を詰めてくれた。…たしかに。懐っこい。

「悪いね、あいつオンナノコ大好きなもんで」

「いいよ」

隣に座って、いかにも今気がついた、みたく切り出す。

「…あれ、ひょつとして、博物館のニュースで映ってた」

のを知ってるから、言っただけ。

「またか。俺、そんなに目立つ?」

ちよつとうんざりした顔をする。どうやら、散々聞かれたらしい。
綺麗な顔してるから、この機会に声かけた奴も多そう。

「うん。金髪なんて、そんなに居ないし。聞いていい?」

「ん? 答えられる範囲なら」

イチゴのタルトを幸せそうにパクついている、永月空。特に警戒
しては居ないみたいだ。

「幽霊が出るって噂。本当?」

「それも、またか、だなー。答えられねえのよ、俺は。伯父様にシメられる」

てことは。

「出るんだ？」

「守秘義務がアリマス」

「こんな噂になってるし、もう諦めなよ」

じつと、空は俺を見て、黙り込んだ。怪しまれたかな。

「……………それ、くれたら、も一つくらい答えてやるよ」

空がそれ、とフォークで指したのは、俺のトレーの上のロールケーキ。この店の一番人気だというから頼んだものの、まだ手をつけてない。…意外と手軽？

「いいよ。じゃ、幽霊について、教えて」

「幽霊…っていうか、誰か、だと思う」

「誰か」

「複数の監視カメラに、僅差の時間に映れて、忽然と消えられる、誰か」

「…人ってこと？」

「それがわかんねえんだよな…同時には画像に残らない。けど、こっちの画面から切れたと思ったら、全然別の画面に入ってきて、切れる。堂々と映る割には、黒い布的なもん被ってるし。足はある」

「…男？女？」

「ん…小柄な女か子供かな。子供だと思うけど。男の」
「…なんで？」

また、永月空は青い目で、じつと俺を見る。長い。

「…なんでそんな熱心に聞きたがんの？アంత」

…変に思われたかな。

「興味、あるから」

…苦しい。我ながら。

永月空が、フォークを齒でかんだまま、ニツと笑った。

「…ふうん」

俺は、基本的に、心が表情に出ない性質たちのはずだけど。この子の青い目は、どうも何かをわかったような色をしてる。

期待薄……だめかも。

「足がさ、裸足なんだ。子供っても、たぶん中学生くらいかな。筋肉とか骨とか、男子っぽいんだよ」

「へえ……」

答えてくれるとは、思わなかった。

感心した振りをしていると、ロールケーキを口に運びながら、空が言った。

「……って、言ったら、信じる？」

……。

「…嘘ついた？」

「さあ？ただ、あんまり素直に聞いてるからさ。ふっつ、うそっ」
とかあるのに」

「…おかしい？」

「どーだろな。ごちそさま！じゃな！俺さき帰るわ」

帰られた…て言うか、逃げられた。

…菊池に嫌味いわれるな。

そつえば、花村いないけど、どうしたんだろうつか？

「あれ、どしたの二人してそんなげんなりして」

「花村が対象の友達にナンパされて付いてって、迷子」

「怜くん！違うの！だって、妹さんの誕生日プレゼント選ぶからって、頼むから…」

「静ちゃん、怪しいとか思わなかったのかい？」

「思ったけど…」

「そんな事より、菊地さん。報告書が出来たんだが、目を通してくれ」

「そんなことって…夏城君、酷い…」

捜査って、難しい (後書き)

小説って…難しい。

モニターの前で夜更かし、ついたら、夜食は必須だろ（前書き）

久しぶりなので、続けてUP。

モニターの前で夜更かし、つったら、夜食は必須だろ

モニターの前で夜更かし、つったら、夜食は必須だろ

おい、聞こえているんだろう。返事くらいしたらどうだ。

…うるせ。それどころじゃねえよ。

おい、このまま力を押し隠していく気か。騒がれてからでは遅いんだぞ。

……。

「…ち。拒否できるようになってきたな」

公園の敷地の一角に立つ、白い円形の建物。その窓際で、交信が途絶えた。つい、舌打つと、菊地さんが振り返った。

「ん？例の声かな？」

ぼさぼさの頭をして、嬉しげに目を細めている。菊地さんにとつて、仲間が増えることは喜ばしいのだ。超常現象対策課は、年中人手不足。俺たち調査員と違って、課長ともなれば、色々と気を使うのだろう。

……俺の知ったことじゃないんだが。

「ああ、遠くはない。やはり、一度会わなくては交信しにくいな。……あちらに、その気がありさえすればいいんだが」

どこに居るかわからない、その誰かは、この頃、話しかけると無視をしたがるから、説得も容易でない。どこの餓鬼か分からないが見つけたら一発殴りたいくらいだ。面倒な。

「テレパス精神感应ですか……会ったことも無い相手につながれるなら、かなりの能力値だ……」

早く就職して欲しい、という願いに満ちた目を向ける上司が一人。

「……最近、俺の“声”を拒否できるようになってきている」

能力地が高いのはいいが、それを使って俺をてこずらせるのは、いただけない。何時繋がるものやら知れないから、業務時間外まで働きかけなくてはならない。いい加減、俺が疲れる。

「随分、つながるようになりましたね。相性がいい」

いいはずあるか。無視。拒否。言い争いの毎日だぞ。

「偶然だ」

「偶然というには、繋がりが深くないですか？毎日ラブコールして

いるくせに」

その手の冗談はよせと言うのが、未だ分らないのかこの人は。アンタもいい加減にしてくれ。殴り倒したくなる。

「その言い方はよせ。好きでやってるわけじゃない」

「怒ることないでしょうに」

「でも、昨日博物館を見に来てた人の中には、居るんですよね？」

苦笑した男の隣で、花村が、おずおずと口を挟んだ。

潜入捜査だと言うのに、なぜフリルやらレースやらの集合物を着てくる？

「^{バス}交信で、本人が零していた言葉からすると。居たはずだ」

「どんな人ですか？とか…」

せめて、その栗色巻き毛についた、巨大なりボンを取れ。目立ちすぎだ。

「…さあな。聞こえてくる声はやたらと能天気な呟きだ。この事件に対する反応からすると、相当に好奇心が強いのだろう」

「女の子？男の子？」

「一人称が『俺』だ」

答えを聞いて、花村は少しがっかりしたらしい。男ばかりの職場に、女友達が欲しかったのだろう。

ここは深夜の博物館。忍び込んだ俺達四人は、違法捜査の最中だ。佐野が、いかにも眠そうに呟く。

「…で。どうすんの」

忍び込むところまでは忍び込んだのだが、静の透視能力を以って、各所を探ると、この先に死角はない。監視カメラがここまで多いとは、流石、永月一族。忍び込まれることに、慣れている。とはいえ、何時までも立ち往生しても……。

「っ」

明らかに俺たちとは違う息遣いが、息を呑んだ。視線が、背中に刺さる。

しまった。

光が、俺たちを照らし出す。

「おい、お前ら！誰の許可得て、入り込んで……」

「キャ

っッ！……！」

絹を裂くような悲鳴というのはこれを指す言葉だろう。

傍にいた俺たちはもちろんのこと、声をかけた影まで、逆に驚いた。思わず、耳を塞いだついでに、懐中電灯を取り落とした。

ガンッ。

「~~~~~っの…」

影が、憤慨したように抗議した。

「博物館で騒ぐな！不法侵入者のくせして！…ん？」

影が、怪訝そうな声を出し、近づいてきた。ぼんやりと姿が見えてくると、知った顔だ。ガラスを通した街の薄明かりに、金色の髪が煌めく。整った造作と、白い肌。薄闇の中でも、瞳の色が明るいのがわかる。花村も、佐野も、菊地さんも、気がついた。

「ごめんなさ…あ」

「あ」

「あれ、空君」

「…ち」

見回りをするには少々若い、小柄な人物は、呆れたように言った。

「『あれ、空君』じゃねえよ。あんたらな。ケーサツだからって何しても許されると思うなよ。訴えちゃうぞ、コノヤロー」

それはまずい。元々、警察内でも、胡散臭いだのなんだのと、爪弾きにされがちな部署。クレームがつくと、すぐさま菊地さんが『エライヒト』に、呼び出される。

「やあ、だつて、上が許可くれないし、それに」

一応は責任者のはずの上司が、頭をかきながら言い訳する。永月空は、腕を組んで、困ったヒトを見る目で、菊池さんを見上げている。

「ケーサツの人なら、他に来てるぜ。あんたらの仲間じゃなさ気だけど」

「そう。彼らがねー、僕らの邪魔するからこうするしかなかったんだよ」

「どっちがどっちの邪魔だろーが、関係ないね。とりあえず出てけよ。監視カメラに映るとソッコで、刑事さんがモニター室から飛んできて、伯父様が訴訟手続きするぞ」

予想よりは好意的な言葉だ。菊地さんが少し肩から力を抜いた。悲鳴を上げて怒られた花村が、佐野の陰に隠れつつ、恐る恐る訊ねた。

「…かばってくれるの?」

「…アンタとアンタ」

花村と佐野を見る。

「ケーキ屋にいたよな? チョウジョウ何たらのお仲間だったんだな」
「…怒ってんの」

黙ってたことに?

佐野の言葉に、永月空は笑った。

「別に。俺でもそーするし。ケーキ、奢ってくれた礼に、見逃してやるよ」

随分お人よしだな。いいのかそんなに信用して。つけこむ方としてはありがたいが。

「…なら、また奢ってやる。だからもう一つ、協力しろ」

そついうと、永月空はあからさまに嫌な顔をした。

「……お前、面の皮ぶあつついなー。びっくりするわ」

「俺だけがここに居たことにして、そのモニター室に『連行』しろ」

言い訳くらいは考えてやる。全てが嘘と言うわけではないし、俺の単独行動なら、まだ始末書で済む。

「しかも、上からかよ? やだね、無駄に連れてって伯父様に大目玉食うには、報酬が釣合わねえし」

「ならば、釣り合う報酬とはなんだ」

このまま帰っては、来た意味が無い。懐柔できる隙は永月空だけだ。

「ん？ん」

しばしあって、思いついたらしい永月空は、期待に満ちた目を向けてきた。

「公園通りにあるアンティークショップにさ、いいカップがあるんだ？フランス料理食べれるくらいするやつ」

博物館の手伝いをしたがる人間は、欲しがるものが違うらしい。ともかく、答えは決まっている。

「わかった買ってやる。菊地さんが」

「ええ！？」

「おーマジか 忘れんなよー、忘れたらチクっちゃうぜ？」

「ちょ、ちよっと！」

「行ってくる。菊地さんたちは、帰ってくれ」

強制的に話を終わらせて、永月の後ろに付いてゆく。後ろから何か聞こえた気がするが、気にしないで置くのがいいだろう。

「いやいやいや、翠君！^{みどり}？なんで僕が」

とにかく今はモニター室だ。

「食う？」

「ああ」

俺の作ってきた夜食用サンドイッチをパクつきながら、翠さんはモニターを見つめてる。

ん、うまつ　　やっぱりバケットにしてセーカイ　粒マスタードも利いてるし

肩を並べてモニターを見てみると、性懲りもなく、普通のけーじさんがモニターの一つをうろうろしてる。「行っても無駄」って、散々言っただのに。見つからない不審者を探しに出て行ってしまったオッサンは、真人間だ。

「クソまじめで立派だなあ…。石田さん」

フツウ、三回行って、何も見つかなかったら、やんなくて行かなくなるだろ？俺ならありえね。

「それだけ取り得だからな」

空腹だったらしい美人さんは、モニターを見つめたまま、そう返してきた。言葉はアレだけど、口調に嫌な感じがねえのが以外。

…て言うか、てめ、喋るときくらい食うのやめろよな。それからもつと味わって食べゆっくり食べ。てか、石田さん達の分残す気ねえだろオマエ。

「なんだ。仲悪いんじゃないんだ」

あ・しまった。最後のスモークサーモンサンド食われた。

「よくはない。俺たちの邪魔をするからな」

「ははは。頭固そーだしな」

『超常現象なんてありもしないものの為に、税金を使いおって…』

とか言ってたもんな。こっちが嫌いじゃなくても、あつちはナカヨクしてくれなさ気。

「…で、なんか判った？張り込み二日目で」

伯父様と石田さんせきいどうし口説いて、翠がここで張り込めるようにしてやって、二日目。眼鏡のいさんに買ってもらった、ニューボーンのカップで飲む紅茶は美味いけど、別にこれだけの為に、コイツを入れてやった訳じゃねえのよ。

専門家の意見って奴、聞かせろよ？

「いや。お前とさしてかわらん。おそらく、瞬間移動テレポートか幻術能力者だろうが…問題は目的だ」

なんだ。ホントに変らん意見だ。

「だなあ……」

溜息もんだ。先が見えねえ。

ポットから、例のカップに新しく紅茶を注ぐと、今日張り込み始めてから、初めて翠がこっち向く。長い指には、しっかりサンドウイッチがホルドされている。

うわ。いつの間にか、サンドが食べつくされてら…。

「お前のほうが、そのあたりに迫っているのではないか」

「…俺？」

奴にも紅茶を注いでやる。

別にいいけど、この茶葉、ダージリンのファーストフラッシュだぜ？好みはあるんだろうけどさ、せめて一口目くらいストレートで味わえよ。問答無用でミルクと砂糖（しかも三杯）ぶち込むなよ。爽やかさが消え去るだろが。つか、俺の特製サンドをそれで流し込むな！

「昼間に永月一族の関係各所を、うろついているのだろう。…かなり前から」

「…あれ、やっぱり俺目立つのな。そのうちばれるだろうとは思ってたけど」

警察だもんな。そんなくらい、調べりやすぐか。

「それで成果は？」

「俺の収獲、堂々と横取りしようとするあたり、国家権力だよな…まあ、いいけど。どうってことねえよ。永月を恨んでる奴なんて、星の数だし？叔父さまだって、ちよつと前まで、某有名企業の社長だったんだし」

…つまり、心当たりが多すぎて、お手上げ、ってこと。

肩をすくめて見せる。

おいコラ、そこで鼻から息を吐くな。自分だって対して収獲無いくせに。…かに…かわいくねえな。

「まあ、嫌がらせにしても遠まわし過ぎる感はあるか…」

「…伯父様に直接危害を加えてないから？でも、ダメージは最上級だぜ」

「館長の展示品に対する入れ込みようを知っていた者は」

「多すぎるって。職員だけじゃねえし。会った事ある人なら、大抵知ってたんだ。そっちも砂漠の砂ほどいるっての」

「…霊障と言っ線も考えられる」

「レイシヨウ？」

「読んで字の如く、霊によりもたらされる障害だ」

「…それ、さあ…調べる方法あんの」

「見える奴がいればな」

「いんのかよ」

「此処にいる。…おい、見」

「うっ ああああああ！！またでたああああ！！」

「……」

美少女的美少年が、俺に「見ろ」と言い切る前に、さつきから空気のようモニター室に存在してた、わっかいけーじさんが、この世の終わりのような声を出した。目の前の美少年は、眉間にしわを寄せて、これ見よがしに溜息をついて、舌打ちする。

……気持ちにはわかんなくもないけどさあ……アンタ。

無視もかわいそうだから振り返ると、スーツ着たにいさんがパニック。普段はそこそこイケメンなんだろうけど。まあ……残念な感じ？

「だから、大人しく帰っとけよ武本サン。この捜査、向いてないって」

出るたびこれで、出ないときは隅のほうで毛布に包まって蹲ってるんだから、邪魔だし五月蠅いし、いくら先輩（石田さん）と、上司が怖いからって、居てもらってもしょうがおがねえんだけど。

修復室の画面に、霊の足。いつもと違うのは、しつこく三度も力

メラの視界を横切ったこと。

ああクソ、また悪化したわけね…。

「…そっちの線の見立ては？」

そっち「靈障。眉唾ばなしに、いちいち適応しなきゃならないこの状況が憎いぜ」

「今のところなんとも言えん」

と、美少年。

うん、君は悪くない。分かってる。解ってるよ？……でも言いたい。

何とか・し・ろ・よ

「…左様ですか。どうしたもんかな？」

後ろで、武本サンが悶えてるけど、もういい加減ツツコムのは疲れた。俺がガシガシと金髪を掻く横で、モニターを見ていた翠サンが、今日始めて俺のほうを向いた。

「？なに」

モニター以外の方向見るとは、メズラシイ。よっぽど何かあるのかと思つて、俺もそつちを向いてみた。

「疑わないのか？」

……………え・なんだそれだけ？

俺は肩をすくめて見せると、伯父様から預かった、鍵束をベルトから外した。

ガシャツ…。

金属のぶつかる音が、室内に響く。そのまま、鍵を探しながらしゃべる。

「今更だろ。揃つて博物館に忍び込めた時点で、常識外の方法でなきゃ、無理だつての。本人が見えるつてなら、見えるんだろ」

「…嘘かも知れんぞ」

「嘘つく理由、ねえだろ？大概は信じないんだろつからさ」

「…醒めているな」

「あんたにや言われたくないね」

どの口で言つてんだよ。お。鍵発見。

「…悪いけど、俺ちよつと見てくるわ」

椅子から立ち上がると、まだこつちを見てた美人さんと目があつた。

「修復室、か？」

「修復中の石版がな。ナンカあると困る。伯父様が嘆くからさ」

行きたか無いんだけどさ。

「何かあったところで、お前が止められはしないと思うが」
「わかってるって」

すぐ戻るからヨロシク。

言って、モニター室から出ようとしたら、

「……！？」

腕ヲ掴ムモノ有り。

「……おい？」

「俺も行く」

「は？いいよべつに」

そついうキャラなの、お前って？

聞く前に、耳を劈く《つんざく》悲鳴。

「ぎゃあああああ！！僕を一人にするなああああ！！」

「……」

部屋の隅の毛布のカタマリが喚いた。

…なんか、イラツとキタ。それは俺だけじゃないらしい。

俺の腕を掴んだまま、美人さんが、繰り返した。

「…俺も行く」

「武本さん、置いてって石田さんに何かいわれねえ？」

「俺が知るか」

「…じゃ、俺も知らね」

モニターの前で夜更かし、つつたら、夜食は必須だろ（後書き）

サンドイッチは、バケットです。私的に。

そろそろ、本格的に話を動かさなくては…と、思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8526/>

うろんな+せいぶつ

2010年10月16日11時13分発行